

ラファエル前派と明治浪漫主義

平成7年9月26日(火)～10月20日(金)

1848年ロンドンのロイヤル・アカデミー在学中の若い画家達が、ヴィクトリア朝の因習的なイギリス絵画に反発し同盟を結びました(The Pre-Raphaelite Brotherhood—略して P. R. B.)。詩人で画家の D. G. ロセッティを主導者に J. E. ミレイ、W. H. ハントがその中心でした。彼らはラファエル以前の 14・15 世紀初期ルネッサンス美術を模範とし、自然の忠実な観察と敬虔さや、素朴な感情表現を大切に、題材を聖書や中世の詩作品に求めました。P. R. B. は 1853 年に解散しますが、有力批評家ジョン・ラスキンの擁護もあり、W. モリスやバーン＝ジョーンズにこの傾向は引き継がれ、やがてアール・ヌーボーから象徴主義に至るさまざまな芸術表現を生みだしました。

P. R. B. の運動は折しも欧風開化の反動期にあった明治 30 年代の日本の文学、美術界に清新な刺激をあたえました。

今回の常設展示会ではラファエル前派の源流とその日本への影響の過程を辿ってみました。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

○ 三人の画家による“オフィーリア”

“オフィーリア”はラファエル前派的主題のひとつといわれています。悲劇的な死・宿命の女を表現するのに、ラファエル前派の画家たちはオフィーリア(ハムレットに愛を拒まれ、絶望のうちに溺死するシェイクスピアのヒロイン)の姿を借りました。ここでは、三人のラファエル前派の画家たちが描いたオフィーリアをお楽しみください。

1. ジョン・エヴァリット・ミレイ(1829-96)

『ラファエル前派』

<KC16-E2730>

アンドレア・ローズ著 谷田博幸訳

- 新潟 西村書店 1994.5 126p
2. アーサー・ヒューズ(1830-1915)
『ラファエル前派画集 女』 <KC16-E1047>
ジャン・マーシュ著 河村錠一郎訳
東京 リプロポート 1990.12 155p
3. ウォーターハウス(1849-1917)
『J. W. Waterhouse』 <KC16-E3004>
J. W. Waterhouse [画] 湊典子解説
東京 トレヴィル 1994.9 1冊
- 展覧会カタログ
- “加藤まことコレクション”の中から日本で開かれたラファエル前派に関する美術展のカタログを並べてみました。
4. 『英国浪漫派版画』
新宿・伊勢丹 昭和55(1980) <VD-1801>
5. 『青木繁 明治浪漫主義とイギリス』
京橋・ブリヂストン美術館 昭和58(1983) <VD-950>
6. 『ラファエル前派とその時代』
新宿・伊勢丹他 昭和60(1985) <VD-612>
7. 『バーン＝ジョーンズと後期ラファエル前派』
新宿・伊勢丹他 昭和62(1987) <VD-1107>
8. 『ラファエル前派とオックスフォード』
新宿・伊勢丹他 昭和62(1987) <VD-565>

(VDは“加藤まことコレクション”で1960-80年代の東京を中心に収集した展覧会図録約2800冊。当館に寄贈され特別資料課で所管しています。)

○ 洋図書

1900(明治 33)年代に刊行された美術関係洋書が明治の日本でも取り寄せられ読まれました。なかでも青木繁は東京美術学校西洋画科在学中(明治 33 年～36 年)に、19 世紀のラファエル前派の美術に関心を持ち、友人蒲原有明からロセッティの画集をはじめとするイギリスの美術書を借りて見ていたことが知られています(『青木繁画集』政教社)。また、友人等の追想によれば、帝国図書館(上野図書館)に足しげく通い哲学、文学、神話、宗教などの本を読み漁ったとありますので、以下のような本も彼は見ていたかもしれません。

9. Fifty years of art, 1849-1899.

Thomson, D. Croal ed. <40-111>

London : H. Virtue and Company, Ltd., 1900 376p

“The art journal” (1839-1912, ロンドンで刊行された月刊誌)に載った記事と図版の中から 19 世紀後半の 50 年に焦点をあて、編集したもの。

10. The modern school of art. vol.111

Meynell, Vilfrid (ed.) <73-173>

London : Cassell & Company, Ltd., 232p

第 1 巻に J. E. ミレイと W. H. ハント、第 3 巻に D. G. ロセッティ、バーン＝ジョーンズが図版入りで紹介されている。

11. Preraphaelite diaries and letters.

Rossetti, William Michael ed. <927.592-R829p>

London : Hurst and Blackett Ltd., 1900 328p

編纂者である W. M. ロセッティは P. R. B. の事務局長を務めた。後に P. R. B. の運動を回顧して数冊の本を出しているが、これはそのひとつ。

12. Five great painters of the Victorian era.

Bayliss, Sir Wyke. <178-86>

London : Sampson Low, Marston & Company, Ltd., 1902 160p

ヴィクトリア朝(1837～1901)の偉大な画家として、レイトン、J. ミレイ、バーン＝ジョーンズ、G. F. ワッツ、W. H. ハントの 5 人を挙げている。

13. Pre-Raphaelite and other poets.

Hearn, Lafcadio 講述, John Erskine ed. <KS74-74>

Freeport : Books for libraries Press, Inc., 1968 432p

(Reprint 版 Originally published by Dodd, Mead and Company, 1922)

1896(明治29)年から、1902(明治36)年まで、小泉八雲は東京帝国大学で英文学を講じた。講義は作品の芸術的鑑賞を特徴としていて学生に大きな感動をあたえた。

○ 和図書・和雑誌

P. R. B. の日本への紹介は明治30年代頃から小泉八雲、島村抱月、上田敏、蒲原有明、夏目漱石等の文学者によってなされ、それはすぐに美術の世界に伝播し、藤島武二、青木繁、村山槐多、竹久夢二等に深い影響をあたえました。P. R. B. の神話・伝説への強い関心、世紀末的雰囲気等が日本の浪漫主義的画家たちに独自の幻想的世界を形作るきっかけ与えたのでした。

14. 小泉八雲全集 第13巻 文学論

田部隆次他訳 <555-15イ>

東京 第一書房 昭和5(1930) 682p

「ロセッティの散文について」

八雲の東大での英文学の講義を聴いた学生たちが後に日本語に翻訳したもの。

なお9月26日は小泉八雲忌。

15. 美術講話

白馬会絵画研究所編 <93-21>

東京 嵩山房 明治35(1901) 189, 15p

岩村 透「プレラフェリストの起源」

岩村透(1850-1917)は1888年から92年まで欧米に留学、ヨーロッパの新しい芸術理論、特にイギリス美術と評論を紹介した。『美術講話』は白馬会絵画研究所における洋画に関する講話を編纂出版したもの。

16. 漾虚集(ようきょしゅう)

夏目漱石著 <KH426-21(2)>

東京 大倉書店 明治39(1905) 302p 複製版

ロンドン滞在中にP. R. B. の作品に接し、かれらに関する文献も入手した漱石が帰国後、その作風に触発され書いた作品群を含む。扉、目次、奥付は橋口五葉のデザイン。

17. 漱石全集 第三巻 草枕

夏目金之助著 <KH426-E32>

東京 岩波書店 1994 [初版は明治39(1906)] 590p

画工である「余」が春の夜、温泉につかり心身を湯の中にふわりふわりと漂わせた時、思い浮かんだのはミレーの“オフエーリア”の顔の表情であった。

18. 上田敏 「ロセッチの詩歌」

『文学界』49号 明治30(1897)年1月 複製版 <Z905-B78>

上田敏はロセッチの詩「神曲地獄界の一節の絵(原題「パオロとフランチェスカ」1855年)と「リリース」(原題「レディ・リリース」1867年)に対する解説として「ロセッチの詩」を書いている。

19. 藤島武二 『明星』表紙画

『明星』 1号 明治35(1902)年1月 複製版 <Z13-2365>

アール・ヌーヴォーの影響の顕著な藤島武二の表紙絵。『明星』は海外美術の中心的話題として P. R. B. を頻繁に取り上げている。

20. 「ロセッチの新尺牘」

『学燈』第62号 明治35(1902)年7月 <Z21-176>

ロセッチが版画師のウィリアム・ジェームス・リントンにあてた手紙。

21. 戸川秋骨 「今日のラファエル前派」

『明星』卯歳第1号 明治36(1903)年1月 複製版 <Z13-2365>

戸川秋骨(1870-1939)は、英文学者、評論家、翻訳家。この作品は「英国ラファエル前派の画家、其組合及び後継者」(Percy Bates 著)の最後の一節を意識したもの。

22. 蒲原有明 「訳詩一章一夢」

『白百合』1巻1号 明治36(1903)年11月 <雑8-26>

Theodore Watts の詩を蒲原有明(1876-1952)が訳したもの。絵はロセッチ「多情多恨のヴィナス」。

23. 「逝けるウィリアム・ホルマン・ハント」

『白樺』第1巻7号 明治43(1910)年10月 複製版 <Z13-1008>

ハントが生涯を芸術と宗教のために捧げたことを讃美している。

ラファエル前派の出現の背景には、産業革命による急激な社会の変化があるといわれています。同派の再評価は70年代から始まっており、1984年にはロンドンでラファエル前派大回顧展が開催されました。それは現代が失っている優雅さや怪しい魅力への憧れを反映しているのかもしれませんが。

*16 の『濛虚集』は本館改修工事のため 96 年 3 月 31 日までご覧になれませんが、マイクロフィッシュ版<YDM96307>が利用できます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)

ホームページアドレス <http://www.ndl.go.jp>

■国立国会図書館■□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□■03(3581)2331■